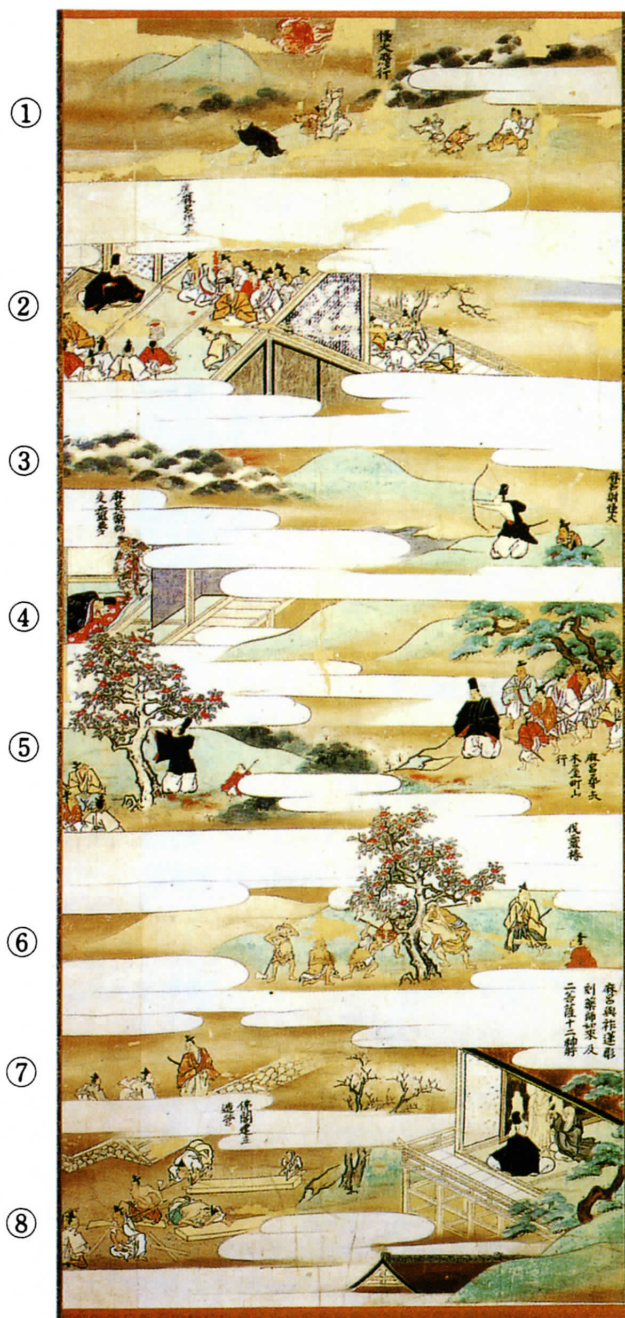


福岡県指定有形文化財

ぶ ぞう じ えん ぎ
武蔵寺縁起

第二幅



※紙本著色 画面 61.7cm×141.3cm

縁起とは、社寺の起こりや沿革、
靈験などの言い伝え、あるいはこれ
を書き記したものをいいます。奈良
時代後期から寺院の増加につれて縁
起もふえ、平安時代後期からは絵巻
物化されていきました。これが縁起
絵図とよばれるものです。室町時代
以降、社寺の経済的な基盤が失われ
はじめると、民衆から寄進を求める
宣伝手段として縁起や縁起絵図は重
要な役割を果たすようになっていき
ました。

全5幅からなる武蔵寺縁起絵図は、
江戸時代中期（18世紀）に描かれた
とされています。

また、江戸時代中期以前に定應
という武蔵寺の僧侶によって書かれ
た「椿花山武蔵寺薬師如来縁起」が
明治期の写本としてあり、縁起絵図
とともに武蔵寺伝説を伝えるものと
して貴重です。

- ①木屋町の山中に不思議な火の玉が現れ、村
人たちは逃げまどう。
- ②虎鷹は酒宴の席で家臣たちからその話を聞
き、
- ③さっそく火の玉退治に出かけた。
- ④その夜、夢枕に摩虎羅大將が現れ、火の玉
は薬師如来の化身であることを告げた。
- ⑤翌日、虎鷹が家臣たちを連れて山に入ると
点々と血が落ちており、たどっていくと大
きな椿に矢がささっていた。
- ⑥夢のお告げどおり椿を切り、
- ⑦都から釈社連という僧侶を呼んで、その椿
で薬師如来の像を刻み、
- ⑧仏像を納める堂を建立した。

椿花山武蔵寺縁起 (写)

以下は武蔵寺縁起絵図第2幅にあたる箇所を抄記したものです。

▼縁起(写)の一部

山口村の木屋町の山交よ夜
怪き光出て炯然とて樹
林に映徹去山堅を耀るに
久して止まら諸人怪し畏れて
日暮れを性来絶えて郷里
の患とてまう此輩他日虎麻呂
群臣と飯宴の席より聞給い
勃然とて曰く予聞て妖
人より由て起ると我當州の守
と護職とて斯く妖怪と治
すべし武略賦とて世人
の嘲を取りん事口惜き今夜
吾一人鬼火の傍へ行き其跡
を見届へと宜と群臣各曰
く是程の怪異なり其一所を
計りかゝる君何ぞ輕き彼
は向ひ給もんとい我等大勢行

あるとき、山口村の木屋町の山あいから夜ごとには怪しい光が出て山野を輝かせるといふ不思議なでき事が起こった。人々はその怪火を恐れて日が暮れると往来はとだえてしまい、それが村の悩みとなっていた。あるとき、虎麿はそのことを聞き、「“災いは人がもたらす”という。私がこの国の守護である以上、いまその妖怪を退治しなければ後のち嘲りの対象となるであろう。これは武人としての名誉にかかわることである。今夜行ってその正体を確かめてやる。」と、家来を一人だけ連れ、弓矢を携えてその山に入ってしまった。

亥の上刻(午後9時ごろ)、思ったとおり、火のようなものが林のなかから飛び出してきた。それはまともに見ることができないほどの輝きを放っていたが、出会ったからにはそれが何であろうと逃がしてなるものかと一心に祈りながら矢を放った。その矢は火玉に命中したと見えて、光はたちまち消えてしまった。虎麿は、してやったりとばかり喜び勇んで館へ帰った。寝床につくと夢の中に不思議な人が現れ、虎麿の枕もとに立って言った。「私は薬師十二神将のうちの摩虎羅大将というものだ。今夜おまえが弓矢で射た火玉は薬師如来が宿った霊木の精である。矢はその霊木にささっているはずだ。火玉となって世間を騒がせたのも、薬師如来が縁あってこの

世に姿を現し、民衆を救い導くためなのだ。早くその霊木で薬師十二神将の像を作り、お堂を建ててお祭りしなさい。それは国家安全・氏族繁栄のためである。疑ってはならない。」と言い終えると姿を消した。虎麿は夢からさめて不思議な気持ちになり、早朝、家来を連れて矢がささっているという木を探しにでかけた。山に入ってみると、火玉が通ったところの草木はすべて変色していた。それを目印に10町(約1km)あまり行った奥深い谷でふたかかえほどもある大きな椿の木に矢がささっているのを発見した。虎麿は驚き、急いでその矢を引き抜き、うやうやしく礼拝して夢に現れた摩虎羅大将のお告げどおりにした。虎麿の親族で京都に釈祚連という有名な僧侶がいたので、相談の上、この椿の木で薬師の尊像である日光月光菩薩十二神将を彫刻することにした。また、堂の建立も釈祚連が指導した。如来十二の願を表して、十二の房舎が建てられた。いわゆる十二寺とは、自泉寺・施薬寺・正法寺・禅正寺・善応寺・道場寺・石水寺・地藏坊・神宮寺・蓮華寺・真養寺・宗正寺である。本堂内外の仏閣には毘舍門堂・大日堂・阿弥陀堂・釈迦堂・地藏堂・観音堂・弁天堂・大黒堂・荒神堂・慈恩堂があり、経蔵、鐘楼、仁王門や鎮守の社として大神宮・荒穂社・八大龍王社・田中宮などを建立した。